

第17回武蔵野市地上部街路に関する話し合いの会
提出資料

平成25年11月7日

資料9-5に対する安西回答についての感想と意見

構成員 古谷 圭一

第15回武蔵野市地上部街路に関する話し合いの会(以下、話し合いの会)における濱本構成員の確認4点と質問11点に対する第16回話し合いの会における安西構成員による東京都の回答について以下の感想と意見をまとめた。結論として、東京都の回答は論理飛躍、矛盾したもので信頼出来るものではない。

1. これまでの話し合いを通じて判断できるのは、当初よりその問題について一貫して対応して来た濱本構成員の解釈と物証と主張と、すでに多数回交代してきた東京都側構成員の計画についての解釈およびその根拠についてを比較して、第三者として客観的に見た場合、東京都側はその根拠となる客観的資料について、「存在しない」、「違った表現だが、同じ内容である」という回答しか行っていない。しかも、それを根拠にして「だから、現在の解釈が正しい」という権威主義的結論を述べるのみである。担当者間の受け継ぎの不正確さをただ謝罪するだけでは、社会通念上「正しい」ことにはならず、客観的に信頼できるものではない。
2. 本話し合いの会で問題とされている「外環と地上部街路について 検討の進め方」(平成20年3月)の内容は、その前段階における「PI外環沿線協議会2年間のまとめ」(平成16年10月)のコンセンサス①「本線のシールドトンネル区間の上部では、大深度か否かはかわらず、施行等にもなう地表面への影響は基本的にないと考えている。」(同まとめ p. 5)、②「外環に関わる計画の見直しに当たり、地上部街路については、地元の意向を踏まえて街路の機能として不必要な部分は廃止となり、必要な部分は整備することとなる。その際、高速道路と地上部街路をあわせて都市計画変更することとなると東京都の説明があった」(同まとめ p. 16)の二点をまったく無視した内容であり、地表面の改変を前提とする「外環と地上部街路について 検討の進め方」(平成20年3月)は、これまでのパブリック・インボルブメントを無視しているもので、この態度は、安西回答と濱本解釈の食い違いを十分に説明できるものである。
3. 安西回答の中の「有識者会議、沿線区市からの外環本線の地下化と外環-2の検討の分離」(第16回議事録 p. 6)は、「計画内容を切り離してではなく」、「検討時期を切り離して」でなければ、さらに莫大な予算が要求される本線地下化の理由が抹殺されることとなり、そのような決定がなされる根拠が失われることとなって、安西回答は矛盾する。

4. 東京都提出資料 第3回資料6において東京都が示した外環-2のモデル道路がすべて既存道路の拡幅(第11回議事要旨D参照)であったように、これまでには「すでに昭和初期より整備されて調和ある住宅街を破壊して新しい道路計画を実施する」例はこれには示されていない。外環計画が地下化される最大の目的は「地上部への影響を可能な限り少なくして、コミュニティ分断を少なくすること」であった。これは、外環計画が本線計画だけでなく、地上部街路計画も含んでいる前提でなければ成り立たないもので、この点でも、安西回答は矛盾しており、濱本構成員の主張は矛盾しない。